

第17回：北海道国際理解教育研究大会・札幌大会終了のお礼

札幌国際理解教育研究会 会長 大瀧 勝
(札幌市立真駒内曙中学校長)

去る10月11日(金)に第17回：北海道国際理解教育研究大会・札幌大会を札幌市立真駒内緑小学校をメイン会場にして開催致しましたが、札幌市は元より全道各地より400名を越える参加者によって盛会裏に終了致しました。

参加者の皆様に衷心よりお礼申し上げます。

また、海外子女教育振興財団、北海道教育委員会、札幌市教育委員会をはじめ、各関係機関及び各種団体のご理解とご後援に厚くお礼を申し上げます。並びに大会を支え成功させて下さいました札幌市立真駒内緑小学校の教職員・父母の皆さんをはじめ、インターナショナル山の手幼稚園、札幌市立石山中学校、札幌市立藻岩高校の教職員の皆さん、提言や助言、司会や記録をして戴きました諸先生の温かいお心に、深く感謝を申し上げます。

さて、本大会は前上川・旭川大会の成果を踏まえ、「いつでも、どこでも、だれでも」の視点に立ち、問題解決的な学習や体験学習を通じて異文化とのふれあいや相互の「違い」を理解すること、そして共存する「生きかた」を考える授業を構築していくことに主眼を置きました。各教科の授業にとどまらず、道徳、特活の領域のみならず領域外の諸活動においても意図的・計画的な実践を広めていくために、先行的な授業や活動も試行して公開致しました。

幼稚園や小学校における英会話指導や父母やボランティアの参加による指導、外国人との交流活動、ALTとのチームティーチング等々であります。

分科会におきましても地域との連携や教師の育成と言う新しい角度からの提言もあり、また各地区の研究と実践の発表もあって活発な討議がなされました。

今様に申しますと常に研究大会は「先進的な情報の集約と発進の場」でありますから、そこに於ける研究の内容が「先進的か、否か。発進にたるか、否か。」が問われる訳であります。本大会はその意味に置いて今後の実践の方向付けにいささかの役割を果たしたものと自負しておるところです。

今後の研究課題としては、

- ① 各領域内における授業実践の累積とカリキュラム化
- ② 3領域間における関連を明確にした年間指導計画の作成と実践化
- ③ 体験学習の導入と国際交流活動の取り入れ
- ④ 「総合的な学習の時間」としての検討

等々があります。

次年度の釧路市における全国大会でこれらの諸課題が更に広く、深く研究され、教育現場における実践が拡充する事を強く祈念するところです。

ありがとうございました。

第17回北海道国際理解教育研究大会・札幌大会盛会裏に終了!

10月11日(金)札幌市立真駒内緑小学校を主会場に開催されました第17回北海道国際理解教育研究大会は全道から400名を越える参加者によって盛会裏に終了することができました。研究授業、分科会の様子などをお知らせいたします。

【研究授業及び分科会の報告】 札幌国際理解教育研究会研究部長 白石 邦彦
〈英会話指導・生活科「心をつたえたいね」…幼稚園・小学校2年〉

幼稚園の授業は、外国人教師による英会話の授業でした。カードを使ったゲームや絵本などを使い活動が展開されました。インターナショナル山の手幼稚園においては3歳児から英語の学習を行っているとのことでした。分科会においては、もう少し一人一人の子供に合った指導を考えていく必要があるのではないかということが話されていました。小学校低学年の授業は、生活科の授業で、以前学校訪問をしたセディさんにビデオレターを送ろうということで活動が展開されました。子供たちは自分たちの学校での様子をどのようにしたら伝えることができるのか、一生懸命考えながら工夫していました。分科会においては、ビデオレターにしぼるのではなく、もっと幅のある活動も考えられるのではないかということが出されました。

〈国語科「まとまりを考えて」……小学校3年生〉

小学校中学年の授業は、国語「くらしと絵文字」の授業でした。子供たちは自分たちが外国の人にわかると思った絵文字やわからないと考えた絵文字に対してその理由を考え、その後外国からみえていたゲストに直接聞く活動がありました。

分科会においては、単に文の中だけでなく、実際に聞く活動を取り入れたことでより深い理解をすることができたのではないかという意見が出されました。

〈理科「秋の天気」……小学校5年生〉

小学校高学年の授業は、理科「気温の変化と天気」の授業でした。気温と太陽高度について、マニラ・ボンペイ・パリからファックスで送られた資料をもとに考察していく活動が展開されました。分科会では、札幌の資料のみでなく、外国の資料を取り入れたことで天気というものを一点ではなく面としての広がりの中でとらえていくことができたのではないかといったことが出されました。

〈英語科「何ができますか」・公民科……中学校1年生・高等学校3年生〉

中学校の授業は、英語「Lesson 7 何ができますか」の授業でした。canを単に言葉だけで終わらせるのではなく、実際にアメリカから取り寄せた缶切りを用い活動が展開されました。子供たちの体験を通すことで実感の伴ったcanになった授業でした。分科会では、体験を通し言葉を実感の伴ったものにしていったことは効果的であったということが話されました。

高校の授業は、公民科・政治経済の授業でした。生徒たちは、提示された資料の中から、貿易について考え、それをまた、自分たちの問題として戻す活動がありました。高校の生徒に望まれる実践力が見られた授業となりました。分科会においては、生徒たちの話し合いの中から、国際協力の必要性が実感の伴った意見として出されたことで理解が深められました。又、発展途上国のもつ苦悩と課題についても認識を深めることができたといったことが話されました。

【課題別研究部会の報告】

札幌国際理解教育研究会 研修部長 広瀬 保志

第一分科会では、国際理解教育のための教育の育成推進として札幌 S E S E の会から JAPAN PROJECT の活動の様子を提言していただきました。札幌 S E S E の会は地域住民、学校関係者が力を合わせて教育環境を整備していく目的で設立された会で、米国アーカンソー州リトルロック市と教員交換プロジェクトの活動が報告されました。

十勝地区国際理解教育研究会からは「どの学校でもできる国際理解教育」の編成とその充実のための教師の日々の実践の報告がありました。

第二分科会では、地域社会との連携による国際理解教育の推進として、札幌市立真駒内緑小学校から地域の教育力の活用について実践例を通して提言していただきました。PTAの英会話ボランティア指導やJICAの研修員との交流の様子を発表していただきました。釧路地方国際理解教育研究会からは「①地域素材の活用②相互が主体的に連携する交流③啓蒙を目的とした取組み」の三観点に絞って推進しているとの発表があり、「地域素材の活用」では、学校現場への浸透を図り、「交流」では釧路市市民講座の共催や国際協力事業団との連携を行っている報告がありました。特に環境問題については、大変参考になる提言をいただけたと思っています。

第三分科会では特色ある国際理解教育の計画実践ということで札幌静修高等学校の『国際科』の開催から現在に至るまでの歩みと実践報告を提言していただきました。多くの人達が欧米指向であることを肯定しつつも、近隣諸国に目を向けた教育をめざし、特に『ロシア』『韓国』『東南アジア諸国』との交流・理解を深め、それぞれの国の生活や文化を生きた形で体得できるようにしたいとのことでした。

旭川市立日章小学校からは、文部省指定「小学校における英語の授業の研究」に取り組んでいる実践報告がありました。研究方法は、英語活動「ななかまどタイム」を中心に、応用発展の場としてクラブ活動の中にも一部取り入れています。学校裁量時間「日章タイム（全学年12時間、単位30分）」では国際理解を中心とした学習を展開しており、授業では聞くことと話す事を中心に歌やゲーム、遊びなどを通して毎週45分の活動を行っているなどの報告がありました。

*詳しくは後日配付される研究集録をご覧ください。

各地区の活動

< 釧路地方 >

◆◆◆◆◆第24回 全国海外子女教育・国際理解教育研究大会◆◆◆◆◆

※ ※ ※ 北海道大会 プレ大会開催のご案内 ※ ※ ※

【大会主題】 広く世界に目を開き、豊かに、たくましく生きる児童生徒の育成
～ 国際性と共生の意識を培う国際理解教育の展開 ～

【期 日】 平成9年2月6日(木)

【会 場】 全体会・分科会 釧路教育研究センター
公開授業 北海道教育大学附属釧路小学校
北海道教育大学附属釧路中学校

【日 程】 10:30 受付 10:50 授業参観 13:00 開会式 13:30 分科会

【公開授業】 小学校1年『体育・ドッジボール』

北海道教育大学附属釧路小学校教諭 辻川 尚志

中学校2年『社会・日本の歴史』

北海道教育大学附属釧路中学校教諭 水野 秀哲

< 網走地区 >

創造的な研究と着実な実践をスローガンに一步一步積み重ねを行っている網走地区より活動報告が参っております。

平成11年には全道大会との声もあり今後の組織の更なる活性化を期待しております。

平成8年 7月 6日(土)

【網走地区の広報誌コミュニケーション】

○海外教育事情研修会

平成8年 7月26日(金)

コミュニケーション いつでもどこでもたれでもできる国際理解教育

○夏期研修会

1996年 7月17日(水) 第1号
網走管内国際理解教育研究会会報・広報部発行

『国際理解とは何か?』

創造的な研究と着実な実践を求めて
会長 関 全

『基底カリキュラム指導事例づくり』

平成8年10月29日(火)

○第9回：網走管内・国際理解教育研究大会

・公開授業『美術』 温根湯中学校教諭

光成 英二

・実践発表『英語劇』 湧別中学校

飛躍的な国際化・情報化・科学技術の進展と共に、地球規模での生命の共存を基盤とする環境問題や児童の権利条約の発効と学校教育の在り方など、私達を取り巻く国内外の社会情勢は、新たな課題に揺れ動いております。そのような現状を踏まえての私たち研究会の果たすべき役割は、研究会発足から9年間の研究・実践を基盤に、次代を担う児童生徒に生きた教育を目指して、より「創造的な研究」より「着実な実践」に努め、地に着いた国際理解教育を推進することにあります。その研究・実践は管内全域に広まりをもたせると共に、研究成果の交流を通し深化させていかなければならないと考えます。

そのため、2月の総会において決定しました今年度の事業計画は、次の方策を基に具体的に推進し、会員の期待に応えていきたいと思っております。

第17回 北海道国際理解研究大会・札幌大会における各地区の交流の記録

～全道大会課題別分科会第4分科会の記録～

今回も全道各地区の発表者より活動内容の報告がありましたのでご紹介いたします。

【釧路地区】

平成4年から6年までを第1次アプローチと考え、5年度的全道大会を軸に、それまでの研究をまとめ、理論の構築を図り、学校現場における推進を目指してきた。平成8年から9年を第2次アプローチと位置付け、学校教育での充実と地域社会との連携、そして国際交流の具体的行動を目指している。9年度は全道・全国大会を控えており、ご協力をお願いしたい。

【小樽地区】

市としてダニーデン・ナホトカ両市との交流。会としては講演会の開催、帰国報告、会報、公開授業を実施している。会員は少しずつ増加しており、Think globally, act locally. を大切に推進している。

【後志地区】

公開授業研、日本人学校経験者の体験報告会、外国人からの日本についての印象を語る会、国際理解教育を語る会、調査、広報等を実施している。教師の意識改革、子どもの実態、親のニーズを考えて推進していきたい。

【十勝地区】

前に実施した全道大会の目標を明確にし見直した。学習指導要領との関連を確認し、項目を整理して推進するようにしている。交流集会、国際交流センターの活用、実践事例集の発行、小学校における英会話クラブ、外国人講師による授業等を実施している。

【渡島地区】

第13回渡島国際理解教育研究大会、合宿研修会（夏・冬）の実施、広報誌の発行、フォスタープランへの継続参加に取り組んでいる。教師のグローバルな感覚と具体的行動を大切に推進している。

【根室地区】

帰国教員の報告会、広報の充実、授業研究会の実施、国際体験発表の夕べの開催、ロシアとのビザなし交流等をしている。地域や学校の実態や特色を生かした国際理解教育のあり方の研究に取り組んでいる。

【松山地区】

研究主題「学校や地域に応じた国際理解教育をどう進めるか」に基づき、学校や地域における国際理解教育の進め方についての研究、海外教育事情についての研修、本会の目的に合致する事業の推進（ユニセフ、地域社会への啓蒙、他団体との交流等）に取り組んでいる。本年度は会員の個人研究を推進している。

【札幌地区】

毎年研究大会を開催し、研究を深めている。また、札幌市教育委員会グループ研究委託や札幌市教育研究所のグループ研究に参加し研究を深めると共に広める活動を行なっている。また、札幌S E S Eの会に参加し、アメリカとの教員交換事業を行なっている。今後実践のアピールを考えてい

きたい。

【留萌地区】

平成8年度 第7回 達布大会（公開授業 達布小・達布中）。管内を南・中・北の3ブロックにわけ、ローテーションで開催している。平成5年度より研究紀要を作成し、道研究大会の報告と個人研究を紹介し、会員の意識の向上に役立てている。

【日高地区】

「世界に目を開く児童生徒の育成」をテーマに、10回目の研究大会を実施している。約100人が参加し、公開授業、北海道教育研究所大澤副所長の講演。海外事情報告会、会報、研究紀要の発行、英語指導助手との連携、及び調査活動に取り組んでいる。

【胆振地区】

地域が広いため研究会の会場を西部（室蘭市）と東部（苫小牧市）に分け年2回実施している。研究会では授業研究、日本人学校帰国報告、海外派遣中学生によるフォーラムを実施。他、派遣教員壮行会、会報の発行、研究会への参加支援を実施。できるだけ授業を大切にしている。

【上川旭川地区】

旭川市教育研究会の中に国際理解教育部ができ、具体的な研究は市教研に求めている。また、上川管内では3つの国際理解教育研究班が市町村研究団体の中に位置付けられ、次年度も増加が予想されている。研究協議会としては国際理解教育巡回展、世界を語る友の会の事業を引き継いでいる。

【石狩地区】

第7回石狩管内国際理解教育研究大会実施の予定

主題「豊かでたくましい心もち、世界に目を開く子供の育成」

～学校全体における実践の拡大を目指して～

会 場 石狩市立紅葉山小学校 期 日 平成8年11月21日（木）

授 業 5学年『社会』

・10の基本目標を管内に広めるよう、実践を深めている。

【空知地区】

平成7年度の授業研究の報告

中学校（技術・家庭科） 「私達と地域の人々とのかかわり方」

～イラク（バクダード）の人々のくらしと平和～

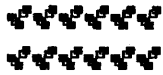
三笠中学校 佐藤 稜子 教諭

小学校（特 活） Lets communicate with foreigner.

観向小学校 石塚 信彦 教諭 ALT Jenifer Johnson

【まとめ】

札幌の基調報告は理念として出し、その具体像は子供像としている。国際理解教育の10の目標については基調報告の基盤となっているが、今後は目標も明記していきたい。今日の論議は国際理解の考えを追求したものであった。これらの論議を各地区にぜひ還流して欲しい。根の所で論議があったのは高く評価される。「根っこ」になる理念と積み上げを武器にして、北海道らしさを発揮して欲しい。



全国国際理解研究大会・佐賀大会に参加して



余市町立東中学校 教諭 渡辺 常彦

8月1、2日の両日にわたり、九州佐賀県においての全国大会に参加させていただく機会を得ました。連日37℃という猛暑。外を数十メートル歩くだけで頭痛と息苦しさに襲われました。

しかし会場の佐賀市文化会館ホール正面に飾られたテーマを見てからはその暑さも忘れたような気がします。テーマは「世界の人びとと共に生きる子供の育成」。折りしも「生きる力」をキーワードとした第15次中教審の第1次答申の方向性との一致を見ました。記念講演では九州大学教授の江淵一氏が「異文化共生社会の教育の課題」と題して国際理解教育のこれからのあり方を示唆しておりました。特に印象深かったのは、文化の多様性に関する知識にとどまることなく、ものの見方や考え方の育成を図るべきだ、とありました。この主張も今日的な教育の方向性とかけ離れるものではなく、大変考えさせられるお話でした。

分科会は4分科会8テーマに別れて活発な発表と討議がなされたようです。私は「海外児童生徒教育」分科会の「日本人学校のあり方」で発表させていただきました。25分間の発表で、この日のために3ヶ月間準備しました。発表後多くの方にねぎらいや励ましをいただいた時は（暑い中ここまで来て良かった。）と心から思いました。内容は北海道国際理解研究協議会発行の「平成7年度 在外日本人学校での教育の現状と展望」に発表した内容をふまえ、加除修正したものを発表しました。以下その発表の内容の概略をご紹介します。

【発表テーマ】 保護者は日本人学校に何を期待するか

【内容の概要】 (私が赴任したトルコ・イスタンブール日本人学校保護者の意識調査をもとにして)

①海外駐在時における在留国との関わりの変化

在住年数別に見て、在留国への意識（好き、嫌いなど）は一般にひとつの国に長く生活すれば生活するほど好きになると考えられるが、数年しかひとつの国に生活できない駐在員ではどうか。意識調査からの結果では、1年目よりは2年目のほうが深くその国と関わり、その国に前向きに対処しようとするが、2年をすぎると変化はない。

②なぜ日本人学校を選択したか

日本人学校に単に日本の教育の引き写しではなく、あえて「日本語の教育」や「日本人としての教育」を期待することで、日本人としてのアイデンティティの確立への切実な願いを感じ取ることができる。

③男女別にみる保護者の学校に期待すること

保護者の男女別の学校への期待には違いが見られる。これは在留国への関わりが、男性は仕事中心であるのに比べて、女性はより広範囲の分野で在留国と関わっていることが挙げられる。女性保護者の現地理解に関する教育に期待することも多い。

④保護者の在住年数によって学校への期待はどう変化するか

保護者の在住年数を1年未満、1年以上2年未満、2年以上の3段階に分けると、学校へ期待することに変化が見られる。例を挙げると、在留国に慣れる時期と思われる1年以上の在住年数の保護者になると、学校にも国際理解教育への期待が強まる。しかし、2年以上の在住年数になってもその期待は強まるかというところではない。逆に帰国のことを考えて、教科学習の定着により一層の期待が強まる。

⑤まとめ

在外教育施設は、その運営において日本の公教育施設のそれよりはるかに厳しいものを強いられる。海外に出る保護者には日本人学校への入学義務があるわけではなく他の現地校等自由に選択できる。保護者の方々の多様な価値観とそのニーズにあった学校を選択できることは望ましいことではあるが、それだけに日本人学校は日本人学校としての他校とは異なった独自性ある教育を求められる。何よりも大切なものは教師の熱意と創意工夫である。そして、それを支える教師集団である。保護者の学校への切実な願いを受けとめながら、教師自らが現地社会に飛び込み、最前線に立って国際理解教育を進めなければ、児童生徒、保護者の意識に響くものを与えるまでには至らない。(以上)

教職員の国際理解教育への意識の低さが指摘されております。国際化への対応が教育の本質やわが国の将来に大きく関わるという認識は、やはり弱いと思わざるを得ません。しかし私はあながち教職員の意識の低さばかりとは言えないような気がします。狭義にせよ広義にせよ国際理解教育の目標があまりにも漠たるものであり、とっつきにくいことにも一因がある気がします。

その意味では一昨年発表された道立教育研究所の中村先生の「国際理解教育の目標の明確化・構造化」は本研究において画期的なことであり、これに沿って石狩大会、上川・旭川大会と研究を深めてきていることは北海道の国際理解教育研究が全国に先がけている証拠と思います。来年の全国大会は北海道釧路市。佐賀市文化会館ホール横のパネルには釧路湿原の大きなポスターが飾られてありました。全国からの同胞がこの北海道に集まることを誇りに思います。

最後ではありますが、このような機会を与えて下さった各関係の方々に心より感謝とお礼を申し上げ、全国大会の報告といたします。

旭川市立啓明小学校（平成5年度韓国・釜山日本人学校派遣） 坪内 夕季子

全世界に広がる日本人学校の中でも、一番日本に近い学校それが、釜山日本人学校です。釜山は大韓民国の下の方に位置し、人口400万、韓国第2位の大都市。そこでの3年間、私は実に多くのことを学ばせて頂きました。日々、発見と驚きの連続であり、人々の暖かい情感に触れ、日本と韓国との微妙な関係に思いを馳せておりました。

外見はとても日本人に似ているのに、違う価値観をもった民族であると言うことが、はっきりとわかります。「礼節の国」と云われるように、上下関係、親族関係での作法は、まだまだ根強いものがあります。誰もがお年寄りや小さな子を大切にすることが、法事・名節他、古来からのしきたりを重んじるなど、同じ中国からの文化を受け継いだ国ながら、その差に驚かすにはいられません。

また、日本でよく云われるように、「対日感情が良くない国だから大変だったでしょう。」という言葉も当てはまりません。それは、外向的な態度であって（対政府の問題）個人的には友好的な人々が多く、快適な暮らしをすることができました。アパートの管理人のおじさん・近所のおばさん・趣味を通じて知り合った若い女性たち・日本語を強制された時代のおじいさんたち・・・たくさんの方々との交流がありました。支えていただきました。

その触れ合いの中から強烈に感じたことを一つ、大学生や大学院生・働く若い人たちが、「日本も昔は雑然とした時期があったでしょう。韓国は日本に追いつき、追い越していくつもり。他の国に留学したって、それは自分の国を発展させるためであって、何かあればすぐ帰国する。自分の国のために。」という、信念を持つて語る様子が、エネルギーでまぶしく見えたのでした。今の日本の若者たちが日本の国のことを語り合っている姿なんてあまり想像できないですよ。私だって、日本を離れてみて、じっくり日本のことを考えたくらいですから。自分の国の批判をも含めた愛国心を持つ若者たちのこと本当に忘れられません。

これからも、様々な機会を通じて、子供たちに隣国・韓国のことを偏見のないように伝えていきたいと思っています。

蘭越町立目名小学校（平成5年度台湾・台中日本人学校派遣） 徳 光 茂

3月20日、上空から眺める千歳空港周辺はまだまだ白い雪に覆われていました。台湾では一度も直に見ることのなかった雪を目にした時、3年前の千歳空港から飛び立ったシーンが蘇ってきて、タイムマシンにでも乗って昔にもどったような気分させられました。あの時の、台湾へ向かう前の期待感と不安感とはまた異なった心境が徐々に襲ってきました。それほどドゥプリと浸った3年間の海外生活だったのです。

台中日本人学校は台湾第3の都市、人口約85万人を有する台中市にありました。近くにはバナナの産地も多く、通称「台湾バナナ」とよばれているバナナの他にも何種類かのバナナを初めて口にすることができました。また、「烏龍茶」の産地も点在しており、新茶が出る頃には車を走らせて、飛びきり気に入った味の烏龍茶を買い求めてきたりもしました。その度毎に感心させられたのが、台湾人の人なつっこさであり、親切な歓迎ぶりでした。ユサユサと風にそよぐ大きな「バナナの葉」、天に向かってスクッとそびえる「ヤシの木」、そして日本では観葉植物としてしかお目にかかったことのない色とりどりの植物群。次第に、台湾人と周りの自然に引かれていくのがわかります。私の住む台中市から約1時間半、山の麓の緑豊かなその町が台湾の中でも最もお気に入りの場所になり、訪れる度に安心感さえ感じるようになりました。

そして派遣3年目の最後の年、本校の現地理解教育の一貫として行っている行事の舞台として、その地を多くの子どもたちに紹介することができました。もちろん、そのために知り合った台湾人の力を借りたことは言うまでもありません。異国で行事を企画することの苦労はありましたが、当日の子どもたちの歓声と喜びは、それまでの苦労をたやすく吹き飛ばしてくれました。バナナの木の回りに群がり大きな房に手をかける子どもたち、パイアの実をとるために悪戦苦闘する子どもたち、どの顔も学校で見せる顔とはひと味もふた味も違っています。そして、もいだばかりのバナナはすぐには食べれないので、予め大量のバナナを用意して冷蔵庫で適温に冷やしておいてくれた農家の人達。全く感謝させられっぱなしの連続でした。

生活習慣の違いに戸惑いを隠せなかった1年目。下手な中国語を使い、自分の足で動くことができるようになった2年目。そして、いつの間にか台湾社会にも馴染み充実感に満ち溢れた3年目。今、台中市の光景と校舎が鮮明に蘇ってきます。

フォーラム

開かれたカリキュラム開発をめざして

国際理解教育の実践をはかる時、いつも話題になるのが、「カリキュラム」の開発である。我々が教育活動を行うのであるから、目的を達成するために必要な教育内容を選択し、組織、提供する計画を開発することは当然だといえる。

しかし、このカリキュラムが、従来のように、一定の目標に効率よく子供たちを到達させようとする道筋を通るのでは、一つの価値観にしばられ、しいては、自国中心で異なるものを否定することになり、教育の変革のてだてとしての力をそぐことになるだろう。また、国際理解教育で育てるものが、現実を認識し、異なる文化や価値観を持つ人達と、地球的視野に立って問題解決をしていく力なのだから、子供が求めていく解決の道が幾つも用意されていなければならないだろう。

こうして考えていくと、教師には、「国際理解」という知識を子供たちに用意するのではなく、「学びの案内人」として国際理解という学びを子供たちと楽しみ、子供自らが国際理解の学びを進めていけるように助言していくことが求められているようである。

大きな主題を中心に幾つもの学習の道筋が準備され、目標に到達することだけでなく、その学びの過程のなかに意味ある経験ができるようなカリキュラムこそ、これから私たちが求めていかなければならないものではないだろうか。国際理解教育を学ぶのではなく、国際理解教育を通して「自分の生き方」を育てていくのである。

図書紹介

「人って違うことを考えているんだ。」ということを実感することは、教室の中ではなかなか大変である。そんな時、だれでもが分かっている事実を土台にして討論させてみると、当たり前だけに余計その違いが明らかになるものである。

そんな時、利用したいのがこの写真集である。この本で紹介されている世界30カ国の普通の暮らしをもとに、子供たちに「1番幸福だと思う国はどここの家族ですか」と質問してみたい。「幸福」という価値の多様さに教師も子供たちもびっくりするはずである。

地球家族 (世界30か国のふつうの暮らし)

マテリアルワールド・プロジェクト

代表 ピーター・メンツェル TOTO出版

《著者紹介》 ピーター・メンツェル [P. Menzel]

このプロジェクトの起草者であり、ディレクターであり、主要なカメラマンの一人でもある。彼の写真は「タイム」などに掲載され、環境に関する国際的な報道で有名である。

海外からの便り

海外教育施設に派遣中の先生方よりお便りが届いています。

平成7年度派遣 ブラジル・マナオス日本人学校 高木司先生より（附属旭川小学校在籍）元気なお便りが参っております。強烈な日ひざしのもとでの運動会、ブラジリアまでの2000kmの修学旅行、お国柄か……過激な選挙活動など現地情報満載の『アマゾンだより』～18号が届いております。お体にお気をつけください。！

先回のこのコーナーでお知らせした内容～アトランタ五輪予選で同組でのサッカー・ブラジル戦…在留の方には少し心配も…（通信アマゾンだより）～ご存じのとおり日本が勝ってしまいました。高木先生の通信では まじめに！『変装して早朝安全出勤する』『用心して外出を控える』など大変だったようです。因みに掛け率は1：40でブラジルだったそうです。ただアントラーズのジーコがスポーツキャスターとして好意的なコメントをおこなったので、日本人がはらいせに襲われるなどのような不測の事態は避けられたようです。

平成7年度派遣 イタリア・ミラノ日本人学校 林 晃淳先生より（当麻町立 当麻中学校在籍）元気なお便りが参っております。3年目を迎えられた先生は中学部3年の担当となり進学指導、運動会、副読本作成などがんばっていらっしゃるようです。残りの任期を充実されるようにお祈りしております。

平成5年度派遣 ブラジル・マナオス日本人学校 河野 匡宏 先生より（北広島市立広葉中学校在籍）元気なお便りが参っております。在マナオスも4年目をむかえ学校運営の要として力を注がれておられるようです。通信『マナオス』ではかって栄華を誇った胡椒の産地『トメーアス』の様子。熱帯の国での『フリーージン』という乾期前の冷たい風の様子。興味深いレポートが届いております。

編集後記

各地区の活動も活発に行われております。特に10月の全道大会での各地区の活動交流では多くの仲間が全道各地で地域の特徴に併せた地道な活動を続けている姿を知ることができ大変感動しました。全道大会を成功させた札幌地区の皆さん本当にご苦労様でした。又、来年度の全国大会に向け多くの人員が札幌大会に参加いただいた釧路地区の皆さんありがとうございました。レセプションの中でも来年度の全国・全道大会に向けた多くの交流がなされたのではないのでしょうか？今後も広い北海道……各地の交流を深めあうように広報活動を充実させたいと思います。是非、地区の活動状況などお知らせください。

【 斎藤 吉文 ・ 石塚 信彦 】